

三船久蔵の空気投げ

「講談本や剣豪小説のように、
”気合”ひとつで相手を倒すことが
できないものだろうか」

この馬鹿馬鹿しいとも思われる
命題に、真剣に取り組んだ柔道家
がいた。東北岩手の産で、三船久蔵
(二八八三〜一九六五)という。のち
に、柔道の神様”とまで謳われた
人物であった。

三船は稽古のおり、「エイツ」と
裂帛の気合をかけて、それから組
み合うことを繰り返した。

だが、幾度やってみても、相手は
気合ひとつでは飛んでくれない。

それでも彼は、この稽古をくり
返し、気持ちのうえでは、「気合つ
つで——相手を投げられるようにな
った。

そこで次には、気合に加えて、ほ
んの少しだけ、相手に触れて放り

投げられないものか、と計画を修
正。二カ月千本稽古を念願し、それ
を貫徹してみせた。まさに「稽古の
虫」である。

これもくり返し試みているうち
に、相手のわずかな隙をとらえ、
観念的には投げ得るようになった
気がした。が、現実には投げ飛ば
すことはできなかった。

それでは、というので今度は、軽
く相手をつかまえて、ほんの少し
自分も動くだけで、なんとかなら
ないものか、と工夫した。しかし、
どうにもうまくいかない。

足をかければそれこそなんとか
なったが、それでは「気合」ひとつの
命題から、離れすぎてしまう。

三船は熟考した。そして発想を
転換し、ゴムまりに執着しはじめ
る。まりは「球」であり、転がりは

するが、絶対に倒れない。

朝、床を離れるや、「球」について
念想する。しばらくすると、「球」
は直線の動きが一番速く、重心が
極めて低いことなどが知れた。

「球の理論」が少しずつ形作られて
いく。しかし、観念的な結論だけ
では、目的には到達しえない。

理論を実践するには、言語を絶
する稽古が必要であった。

いつしか三船の技は、際立ったス
ピードをもつようになった。

そしてついに、ほとぼる汗の中
から、相手の重心の移動を利用し
て、足腰にまったく触れず、体の捌
き、移動だけで相当大きく、しか
もきれいに相手を投げるコツを会
得する。「空気投げ」(柔道用語で
は「隅落し」)の誕生であった。

昭和五年(一九三〇)十月、第一



PROFILE
加来 耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門知識を駆使し、時代考証はもちろん、テレビ・ラジオ番組で監修・構成・出演などを幅広く手がけている。

回全日本柔道選手権大会が開催
されたときである。

三船は同じ七段の佐村嘉一郎と
特別試合を行ない、みごと佐村を
この「空気投げ」で倒し、その真価
のほどを証明してみせた。

「空気投げ」誕生の秘訣を問われ
た三船は、ただ一言、
「非凡は凡の中にある」
とのみ答えたという。

(了)

